「敦煌学」創始に大きな役割

京大人文研 90年の学知

④

永田知之（中国古典文学）

ながた・ともゆき　1975年奈良県生まれ。京都大博士(文学)。2013年から京都大人文科学研究所准教授。専攻は中国古典文学、特に文学理論だが、その傍ら敦煌学の研究にも関わる。著書に「唐代の文学理論―『復古』と『創新』」「理論と批評　古典中国の文学思潮」がある。

清代末期の1900年、中国北西部の敦煌（現甘粛省敦煌市）郊外にある莫高窟と総称される石窟寺院（洞窟の壁面に仏像を刻みだすなどして造られた寺院）の一つから大量の文献が見つかった。多くは唐・五代（618～960年）に書かれた古典中国語の写本だが、チベット語などの文献も含まれる。その価値に着目した英仏両国の学者が1907、08年に多数の写本を購入して、おのおの本国へ持ち帰る。続いてロシアの探検隊や中国政府も、獲得に動く。今日では英仏露中を中心として、各国に敦煌写本は分散して収蔵される。

フランス人研究者の入手した写本の写真が中国の学者羅振玉からもたらされるなどして、関連する情報は、内藤湖南や狩野直喜といった日本の東洋学者にも知られることになった。創設（1906年）から日の浅い京都帝国大学文科大学（現京都大学文学部）の教授として新しい中国学を創始すべく奮闘する彼らは、敦煌写本を類例のない新資料と直感したようだ。写真が届いた09年、京都府立図書館で内藤らはその展観・説明会を開く。また翌年には北京、後には欧州へと彼らは敦煌写本の調査に赴いた。

もとより日本国内で、京都の学者だけが敦煌写本の研究に熱心だったわけではない。ただ国籍を問わない学者同士の連携は、京都における研究の特徴と言える。辛亥革命後の混乱を避けて、1911年に来日した羅振玉と弟子の王国維を例に取ろう。西本願寺の法主で同じ時期に第3次大谷探検隊を派遣し、敦煌写本を獲得した大谷光瑞の招きを受けた2人は、京都帝国大学の近辺に居を構えた。王国維はそれより数年、敦煌写本を材料の一つとして、中国学の研究に没頭する。友人の狩野は、欧州で得た敦煌写本の情報を提供して研究を助けたが、王国維のような優れた学者から京都の研究者が受けた刺激も小さくなかった。

大英博物館から送られてきた敦煌写本の写真を焼き付けた冊子（京都大人文研所蔵）

多分野の学者誘う資料群

1956年秋、大英博物館に所蔵される敦煌写本ほぼ全てのマイクロフィルムが、日本に届けられた。約10万枚の写真を備え付ける機関として、京都では人文研（前身の一つは狩野が初代所長を務めた東方文化学院京都研究所）が選ばれる。これは、敦煌写本研究の伝統が狩野ら亡き後も京都に続いていると学界で認識されていたことを物語る。この後、人文研の教授だった藤枝晃は、共同研究班を組織して自身と班員による多くの成果を公にした。なお井上靖の歴史小説『敦煌』（59年）は、藤枝から得た知識に基づいて著された。

さて狩野が文学、内藤が文化史、藤枝が社会経済史というように、同じ中国学でも本領とする領域はみな異なる。このことは、6万点とも言われる敦煌写本の内容と大きく関わる。もともと寺院の所有物だったろう、これらの写本は9割がた仏典だが、他に皇帝の詔勅や儒教・道教・文学・医学などの文献、果ては借金の証文といった文書まで含まれる。多分野の専門家を研究に誘う要素が、そこに存在する。写本および莫高窟に伝わる仏像・壁画や遺跡自体を資料に用いる学術研究は「敦煌学」と呼ばれるが、中国中世の歴史・文化を解明する上で、その成果は大きな推進力となってきた。写本が各国に散ったためか、敦煌学には東洋学の他の分野にはない国際性が見受けられる。

2015年に京都大で開かれた敦煌学の国際学会の会場。日中、欧州などの40人を超える専門家が登壇した

2015年1月、「敦煌学国際学術研討会Kyoto」が、人文研の主催の下、京都大学で開かれた。日本で初めて開催された、この敦煌学の国際学会では、何人もの登壇者が「京都は敦煌学揺籃(発祥)の地」と述べていた。王国維との交流の中で狩野らが敦煌学の創始に果たした役割を彼ら外国人も認識していることを実感しつつ、筆者としては京都の中国学が持つ伝統の重みを再確認した次第である。（寄稿）

＝毎月第3木曜に掲載します